

ローマ人への手紙14章1-12節 「互いの一致」

1A さばいてはいけません 1-12

3つの理由

1B 神がすべての人を受け入れてくださったから 1-4

2B 主にあって行なっているから 5-9

3B 神に申し開きをするから 10-12

2A つまずかせてはいけません 13-23

3つの分野

1B 妨げとなるものを置かない決意 13-15

2B 霊的成長に役立つことの追求 16-21

3B 自分自身で信仰を保つ責任 22-23

本文

私たちのローマ人への手紙は、14章に入ります。キリスト者としての実践、その具体的な生活の指針をパウロからの教えによって学んでいます。前回は、社会生活におけるキリスト者の歩みを見ましたが、為政者やその法律にはキリストにあって従う、そして納税もしっかりと行なうというものでした。けれども、私たちは規則に縛られる生活ではなく、愛こそが人々への負債である、互いに愛し合うということこそが、神から与えられた戒めです。そして、主が戻って来られる救いの日が近づいているということで、闇の業を打ち捨てる必要があるという勧めがありました。世に対して、社会に対して主にある責任を果たしつつも、深入りしない、思い煩わない、世の有様は過ぎ去るのだから、という姿勢が必要です。

そして14章はある意味で、ローマ人への手紙のもう一つのテーマになるかと思います。厳密に言うと14章から15章6節まで書かれていて、「教会の一致」です。そして15章の6節まで書いていて、7節以降でパウロが、自分が異邦人への福音宣教者でありながら、ユダヤ人とのつながりを説明する文章を書いています。パウロが宣べ伝えていたのは、次の福音です。1章16節に書かれています。「ローマ 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、と言っているところです。イスラエルに与えられた福音は、ユダヤ人に与えられていたけれども、異邦人はユダヤ教に改宗することによってその救いを得られると信じられていました。それが、異邦人がユダヤ人にならなくとも、そのままイエスを信じる信仰によって救われると、彼は啓示を受けたのです。そして、ユダヤ人への使徒であったペテロも同じ啓示を、百人隊長コルネリオの回心によって、知りました。

しかしここで問題となるのは、教会において、キリストにあってユダヤ人だけでなく、異邦人もいるということです。共に同じ主を礼拝し、賛美し、互いに仕え合います。しかし、そこには民族の違い、文化の違い、宗教の違いなど、背景がかなり違う人々が共にいることとなります。そして、ユダヤ人にとっては、割礼というものがアブラハムの契約、またモーセの律法の中でとても大事でありました。これを受けることによって、初めて神の子供になることができると信じていたのです。それで、「異邦人も割礼を受けて、モーセの律法を守ることによって救われる」とする割礼派がアンテオケに来て、パウロとバルナバと激しい議論になり、エルサレムの会議にて決着をつけ、ペテロがパウロと同じ意見に立ち、ヤコブが聖霊に示されて御言葉を取り上げ、異邦人に重荷を課さないことで一致しました。ヤコブはこう言っています。「使徒 15:19-21 そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。昔から、町ごとにモーセの律法を宣べる者がいて、それが安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」つまり、ユダヤ人が習慣的に避けているものがあって、それを異邦人も一定の理解があるから、この三つについては重荷にはならないだろうと判断したのです。

このように、ユダヤ人と異邦人が一つになっているということは、とてつもない努力が必要でした。それで、ユダヤ人の律法や習慣に関わることで、それぞれの与えられた信仰の度合いで、意見がかなり異なることがありました。そこで意見が対立したり、相手を批判したり、見下したりして、その中で誰かが躓いてしまうということが起こります。

ローマ人への手紙にも、ユダヤ人と異邦人の信者の確執について、ここ 14 章以外にも垣間見ることができる箇所があります。ローマ 11 章です。そこでパウロが異邦人の方々にいうと断って、オリーブの木への接ぎ木の譬えを話しました。「彼らは不信仰によっておられ、あなたがたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。(11:20)」おそらく、ローマの教会では反対現象が起こっていたような気がします。使徒の働き 18 章 2 節に、「クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令した」とあります。紀元 54 年にクラウデオ皇帝が死んでネロが皇帝になった時に、ユダヤ人たちが再びローマに戻ることを許されました。その間に、異邦人が教会の中核になっていた可能性があります。それで、ユダヤ人は神の契約から外されたのだという空気があったかもしれません。人間弱いものです、神の恵みを当然の権利のように思ってしまう高ぶり。そして何か悪いことが起こると、それを神の呪いだとみなす傾向。こうやって、神の恵みによる救いから揺れると、教会に一致と平安がなくなっていきます。

このようにユダヤ人と異邦人の信者が共に礼拝するローマにある教会に対して、その不一致を避けるべく、愛の原則によって彼らを指導しようとしているのが 14 章です。ところで、教会の一致という課題は、ユダヤ人と異邦人の間だけではありません。コリントにある教会は、どの指導者に付くかということで分裂していました(1コリント 1:11-13)。ガラテヤにある教会は、理由はよく分か

りませんが、「互いにかみ合ったり、食い合ったりしている」とあります(5:15)。ピリピにある教会は、女性の教会の働き手に対立していて、教会が分裂しそうになっていました(4:1-3)。それで、エペソにある教会に対してパウロが、「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。(エペソ 4:3)」と言いました。

1A さばいてはいけません 1-12

1B 神がすべての人を受け入れてくださったから 1-4

1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。3 食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。

パウロが取り上げているのは、「肉も含めて何でも食べて良い」と思っている人と、「野菜よりほかには食べない」と思っている人がいるという意見の違いがありました。パウロ自身は、福音の真理に照らして、何でも食べてよいという立場を取っていますが、しかしユダヤ人にとって、異邦人社会において、市場で売られている肉は偶像に捧げられて、それから市場で売られているので、偶像礼拝と関わるということで心を痛めていました。その他、レビ記 11 章にある食物規定に従って、イスラエル人が習慣として汚れた動物、清い動物の区別をしていました。そのために、信者になったと言っても、その習慣をやめることに勇気が出ない、心が痛むという人たちもいたのです。

けれども、いろいろな意見の人たちについて、「受け入れなさい」とパウロは命じています。私たちは、福音によって神に近づく人々が自由に近づくことができるようにする態勢が必要です。いかがでしょうか、私たちはまず、キリストにあって神から受け入れられたのです(ローマ 15:7)。ただ福音という理由だけで、躓くのであればそれは仕方がないでしょう。主は全ての人々が喜んで福音を受け入れることは、約束されていません。けれども、どんな背景を持っていても、どんな思想や考え、どんな格好をしていても、民族や国も、性別もすべて関係なく、ただ福音のみで神は人々をキリストによってご自身に引き寄せようとされています。

そして、「その意見をさばいてはいけません」と言っていますが、「意見」というのは、「**疑わしいもの**」と言い換えることができます。つまり、意見がわかること、はっきりと明確な答えが出せないものということです。私たちには、白黒はっきりさせることのできないグレーの部分、灰色の部分があります。はっきりしているものがありますね。恵みの福音そのものがそうです。パウロは、ガラテヤの教会に対して、日や月を守っているような彼らについて、福音から離れてしまったことを教えています。けれども、ここでは彼らが救われていないということを意味していません。パウロが手紙で、厳しく偽の教えであると責めているのは、「これらのことを行なうことによって、救われる」という教えでありました。キリストにある神の救いの他に、何か他のものを付け足す時、それはもはや福

音ではない、別の福音であり、アナテマ、呪われるべきと言ったのです。ここで、肉を食べずに野菜だけを食するという人々は、律法を守ることによって救われるとは思っていません。けれども一度、偶像に捧げられたものであれば、もうその肉が汚れていると考えてしまったと考えてしまっていたのです。そういった意見についてのことです。

私たちには、はっきりしていることがあります。福音についてのこと、また罪についてのこと、聖書の中に啓示されています。13章においても、「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。(13節)」とありました。罪であることを罪であるとするのは、ここで言っている「さばいている」とか、「受け入れていない」ということではありません。そうではなく、聖書で罪と言われていないことについても、そこに良心の咎めを感じている、そういった信仰にある自由を完全に楽しめていないという意味であります。

私たちは習慣や考え方によって、いろいろな意識を持っていますね。例えば、お酒はどうでしょうか？「お酒を飲むことそのものが、罪である」と書いてあるのでしょうか？違いますね、酔いしれてはいけませんが、お酒そのものがいけないとは書いていません。実に聖餐式そのものが、イエス様はぶどう酒を飲まれています。けれども、私たちの教会ではブドウ・ジュースにしています。それについては、次回説明できるでしょう。タバコも同じ事が言えますね。服装はどうでしょうか？

そして私たちにとっては、偶像礼拝についてはとても繊細になっていますし、意見が異なる分野です。ある人は神社の境内そのものに入ることを避けます。またある人は、仏教の葬儀で焼香をする人までいます。また、礼拝の仕方についてはどうでしょうか？ある教会では、賛美の時に踊る人もいます。またある教会では、厳かに賛美歌のみで歌っています。バプテスマの授け方にも違いがありますね、水に浸かる浸礼を信じているところと、滴礼のところがあります。神学の違いもありますね、私たちはイエス様が教会のためにすぐにでも来られて、天に引き上げられ、それから神の怒りが地に下ると信じていますが、そのように信じていない人たちもいます。またそのように信じていない人たちから、裁かれることもしばしばあります。このように、「疑わしいもの」というのは、いろいろありますね。

そこでパウロは、「食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。」と言っています。食べる人は信仰の自由を十分に楽しめている人ですが、食べない人たちが「ああ、そういう規則にまだ縛られているのね」と侮ることができますが、それをしてはいけなしと言っています。その反対に、食べない人は食べている人を見て、「あの人は罪を犯している、神の基準から落ちている。はたしてクリスチャンのすることでしょうか。」と裁いてしまいます。そのようなことをすれば、福音以外のことで人々が交わりの中に入ることができなくなり、そこにおいて神の御心から外れていることを行なっていると言えるのです。

ところで、「裁く」ということについて、キリスト者の間で多くの誤解があるので説明したいと思います。イエス様は、「裁いてはいけません、裁かれないためです」と言われましたが、裁くことを全否定してはられません。「裁く」に関連した御言葉を紹介したいと思います。「1コリント 2:15 御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分は何れによってもわきまえられません。」わきまえるという言葉が使われていますが、いろいろなことを私たちは弁える必要がありますね。「1ヨハネ 4:1 愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」試さないといけない、と言っています。偽預言者がたくさん出てきているのですから、しっかりと見極めないといけませんね。そして、「1コリント 5:12-13 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」これは、信者と称する者が他の信者に対して害を加えている時に、教会外の裁判所で決着するのではなく、教会の内部で裁きなさいと言っているところです。時に教会は、教会戒規ということで罪を犯して、悔い改めない者を交わりに入れないようにする必要があります。そして自分を吟味することもあります。「1コリント 11:31 しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。」このように、私たちは裁かなければいけないことが、数多くあります。

けれども、何をもって「さばいてはいけない」と言っているのでしょうか。それが、ここで議論されていることであり、はっきりと罪とされているものでないことで、まるで罪を犯しているかのようにみなすことです。イエス様が、「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。(ヨハネ 7:24)」と言われましたが、そのように見えるかもしれないけれども、断定できないことはたくさんあります。自分はその事実の全てを知っているわけではない。その動機も分かりません。主観が入っているので、客観性に欠けることもあるでしょう。前から否定的な感情が元々あって、それで何かが起こると、実際以上に悪く見なすこともあります。

そして、侮ることは、相手よりも自分のほうが霊的に優れていると思う時のことです。自分自身が、これが正しいからと行って行っている、その確信はあってよいのです。けれども、それと異なることを行なっている、何か制約されていると感じる動き方をしている人々がいるとします。すると、「ああ、この人たちはまだ、古い習慣に縛られている。」であるとか、自分たちの信じ方が優れていると思うし、話してしまいます。けれども、その態度によって疎外を人々に与え、分裂をもたらすのです。パウロは、「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。(ローマ 12:10)」と言っています。ですから、自分が正しいと思っていることと異なることを行なっている、けれども、それが聖書で明確に書いているわけではないことであれば、その意見を尊重し、受け入れるということが大切です。

4 あなたはいつたいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、

その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。

なぜ裁くのか？という問いの続きがここに書かれています。私たちがふと忘れてしまうことは、「自分がしもべであり、イエス様が主人だ」ということです。主のために生きているようで、いつの間にか主客転倒が起こります。自分がキリストに付くのではなく、自分にキリストを付かせようとするのです。自分の正しいと思う理解を、キリストの名によって絶対化させるのです。けれども、そうではありません。しもべはしもべです。神は神です。神のみが裁くことのできる方です。ですから、他の人のことについて、あたかも自分が神であるかのように判定してはならないということです。裁きは主に任せて、自分は自分で主の命令に従うことに集中していればよいのです。パウロも相当、いろいろな人から批評を受け、裁かれていました。彼は自分自身をも裁かないという説明をしています。「1コリント4:3-4しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。」

そしてパウロは、「このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」とあります。倒れているように見えるしもべでも、主が立たせることができになります。いつまでも、そのようではないのだということです。ですから、あたかもその人は主から離れてしまって、それである人は神に棄てられたのだと見るのは間違っています。もしかしたら、立つことができるかもしれない。そう思えば、私たちと意見の合わない人たちに対しても、憐れみの目を向けることができるでしょう。

2B 主にあって行なっているから 5-9

5 ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。

パウロは、もう一つ教会の中で意見が異なっている問題を取り上げました。「ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。」とのこと。ここでは安息日を筆頭に、他の祭りの日も含めた数々の、主に対する聖日のことであろうと考えられます。安息日を守ることによって、初めてイスラエルの救いの中に入ることができるというのが、ユダヤ人たちの信仰でした。しかし、主が死んで甦られた後、キリスト者が安息日を守っている姿は出て来ません。出て来る時は、ガラテヤにある教会、コロサイにある教会など、律法主義に陥っている異邦人の信者たちに、警鐘を鳴らしている場面においてです。

安息日は、モーセによるイスラエルとの契約、すなわち古い契約の中で印として与えられたものです。「出エジプト 31:16-17 イスラエル人はこの安息を守り、永遠の契約として、代々にわたり、この安息を守らなければならない。これは、永遠に、わたしとイスラエル人との間のしるしである。それは主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれたからである。」したがって、異邦人が守るように命じられているものでは、そもそもありません。しかし、救いがイスラエルに与えられているのですから、異邦人もイスラエルの共同体に入り、つまり自分たちも安息日を守って生きて行かないといけないという論理になります。

しかし、古い契約は過ぎ去りました。新しい契約の中に私たちは入っています。初代教会において安息日に集まっているという形跡を見ることが出来ません。見るのは、日毎に家々に集まって、パンを裂いていたという、教会が誕生したばかりの時と、それから、「週の初めの日」すなわち、イエスが甦られた日に集まることが書き記されています。「使徒 20:7 週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。そのときパウロは、翌日出発することになっていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。」イエス様が甦られたのは、日曜の朝早くですが、この箇所では土曜の夜遅くであったようです。イスラエルでは、日没から次の日が始まると考えられていたので、安息日も土曜日の日没で終わり、土曜の晩は既に週の初めの日です。そして、「1コリント 16:2 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおののおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。」そして、パウロたち宣教の一行が、安息日に会堂に行っている姿を見ますが、それは礼拝のためではなく、伝道のために行っています(例:使徒 13:14-18)。

ですから、週の初めの日に私たちが集まることは、とても相応しいことです。イエス様が復活され、また五旬節の満ちた時、すなわち日曜日に聖霊が下り、教会が生まれたのですから、日曜礼拝というのはふさわしい事です。しかし、使徒たちの手紙に週の初めの日に礼拝しなければいけないという命令はありません。集まらなければいけないという命令はあります、ですから私たちは集まって礼拝することは神の命令なのですが、何曜日に集まらなければいけないということは、教えとしては無いのです。ですから、どの曜日も自分たちの決めた曜日に集まればよいでしょう。例えば、イスラエルにあるキリスト者たちの礼拝は、日曜日ではなく土曜日に集まる場所が多いです。その日が休日だからです。そしてネパールも、日曜日ではなく土曜日が公休日です。ですからほとんどの教会が、土曜日に集まっています。全ての日が主によって与えられており、キリストにあって安息日は成就したのですから、どの日でも良いのです。

けれども、そう考えない人々もいるということです。それがこの手紙に書かれている背景です。ある日を他の日に比べて、大事だと考えている人々がいるのです。ユダヤ人信者に、そういう人たちが多く、今でも存在します。そして、セブンスデー・アドベンティストの人たちはまさに、土曜日こそが聖日と考えて礼拝しています。そして改革派や、長老派と呼ばれる人々は、日曜日に安息日

が移ったと考える人々がおり、日曜日を厳格に働かないとして守っている人々もいます。

そしてパウロは、私たちが裁いてはいけない次の理由を挙げています。一つ目の理由は、「主が全ての人を受け入れてくださった」ということでした。躓くのであれば、福音だけで躓くのであって、それ以外のことで私たちは躓かせてはいけません。そしてここでの理由、二つ目の理由は、「それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。」ということです。いろいろ意見が分れる時に、大事な点は、「主が信仰の量りに応じて、与えられた確信だ」ということなのです。安息日が他の日と比べて聖なる日であると考えられる人々がありますが、その人たちはそういう信仰をもって、主に対して守っています。同じように、他の曜日も主に対して礼拝ができると考えている人々は、主に対してそのことを行なっているのです。主に対して行なっている、主に感謝しているということ、その信仰こそが大事なものであって、本質は主との生きた関わりなのです。

そこで誤りは、「自分に対して主が与えてくださった確信を、他の人々に押し付ける」ことであります。私たちはとかく、自分が主によって示されたこと、強く確信が与えられ、それを行なって祝福されたことと確信すると、それを他の人々に教えたがります。断食を長い日にちしました、すると、断食ができないいろいろな状況のある人々もいるし、断食するほどの信仰が与えられていない人もいるのに、断食をしなければ霊的ではないという結論を出す人がいます。あるいは、聖書を学んで、患難が来る前に携拳があるのだと確信したとします。すると、携拳が患難の前にあると信じていない人にそれを伝えることが福音であるかのように考える人々があります。そうではないでしょう、断食にしても、携拳にしても、それは主に与えられた確信であって、その確信に基づいて自分が動く時に、御霊によって自分がキリストの似姿に変えられているということが大事なのですね。

7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。

パウロはここで再び、イエスが主であって、自分自身は主に目を向けるべきだということを強調しています。先は、主人としもべの関係を話しましたが、ここでは、自分が生きるにしても、死ぬにしても、すべてが主のためにしていることであり、自分は主のものであるという大前提を話しています。自分自身が自分のものではないことは、他の箇所でもパウロは話しています。「1コリント 6:19-20 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」そして、死ぬことにおいても、生きることにおいても、すべてにおいて主が支配されていることも、他の箇所でも話しています。「2コリント 5:14-15 というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。

私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」

そして「キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」と9節でパウロが言っているのは、今、生きている人についてもイエスが主であるし、死んでいった人についてもイエスが主であるし、だから私たちが裁く立場にはいないということです。そこで、この甦られた方こそが、全ての事を裁かれるのだということを次に話しています。

3B 神に申し開きをするから 10-12

10 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。11 次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」

ここの「神のさばきの座」というのは、ギリシヤ語の異本において、「キリストのさばきの御座」となっています。聖書には、いろいろな種類のさばきについて教えています。けれども、主なものは、黙示録 20 章に書かれている「大きな白い御座」と、ここの「キリストのさばきの御座」の二つです。大きな白い御座は、千年王国が終わり、すべての物が滅び去り、新しい天と地が造られる前に存在します。父なる神ご自身が、おのおのの行ないに応じてさばかれて、いのちの書に記されていない者は火と硫黄の池に投げ込まれます。これが、パウロがローマ書においてさまざまところで語っている、「罪に定められる」と言うことです。キリスト・イエスにある者は、決して罪に定められることはありません、という言葉は私たちは知っています。キリストにある者は、このさばきの御座で罰を受けることはありません。もう一つの「キリストのさばきの御座」は、私たち教会が天に引き上げられたときに、私たち信者が受けるさばきです。パウロは、コリント人への第二の手紙で、「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。(5:10)」と言いました。これは罰を受けるさばきではなく、賞を受け取るさばきです。ここの原語はピーマであり、オリンピックの選手が審査員から表彰を受けるときの褒美のことを話しています。イエスさまから、「よくやった、忠実な良いしもべだ。」とほめられるさばきであります。

それでは、私たちがどのような基準でさばかれるのでしょうか。コリント第一4章には、「暗やみのことを明るみに出し、心の動機も明るみに出される。(4:5 参照)」と書かれています。目に見える成果ではなく、それらのことを行なったときの動機によってさばかれるのです。イエスさまは、人に見られるために行なう善行は、すでに報いを受けるので、天においては報いが残されていない、と教

えられました。また、いやいやながら、強いられるようにして行なったことについては天において報いはありません。コリント第一 3 章には、これらの動機で行なったものはみな、火によって焼かれて、残ったものによって報いを受ける、と書かれています。これがキリストのさばきの座です。

ですから、なぜこのように、信者を各々裁かれる方がおられるのに、私たちが兄弟を裁くことができるのか？と問いかけています。ヤコブの手紙にも、兄弟たちが敵対している姿を教会で見ている、それに対して警告しているヤコブの文を読むことができます。「5:9 兄弟たち。互いにつぶやき合ってははいけません。さばかれないためです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立っておられます。」

12 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。

裁いてはいけないことに対する三つ目の理由です。一つ目は、神が受け入れられたのだから、自分も受け入れるということ。二つ目は、それぞれが信仰によって確信を持っているのだから、それを自分の中に持っていて、主に対して行なうということ。そして三つ目は、ここにあるように、キリストの裁きの座において申し開きをしなければならないことです。

私たちが、この地上で行なっていることについて、すべて申し開きします。自分についてすべて判定して下さる方が、私たちを見ております。ですから、私たちは互いにさばく必要はなく、むしろ自分自身をさばいていかなければいけません。今していることは、主に喜ばれることなのかどうか、おのおのが判断をしなければいけません。そして、イエスさまが私たちのために戻って来られるとき、すべての判定が下されるのです。「1コリント 4:5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」

ここに、「おのおの自分のことを」とありますね。「あの人が、私にこんなことをしたから、私はこれこれのことを行なったのです。」という言い訳はできません。自分がどのように反応したか、そのことで責任が問われるのです。人間は主体性のある、責任を負った存在なのです。

こうやって、「裁いてはいけない」ということを学びました。次回は、同じ教会の一致のテーマですが、もっと積極面、つまり「愛によって建て上げる」ということを見ていきます。